

白金葎

3月号



平成31年3月発行

第96号

定例会(毎月第三金曜日 アビスタ会議室)

四月十九日(金 第四正午〜三時…当季雑詠五句

五月十七日(金 第五正午〜三時…当季雑詠五句

六月十五日(金 第四正午〜三時…当季雑詠五句

三月例会句会報(19/3/15 春の月、蜷 10名欠2)

光成高志

啓蟄やさんみやくさんぼだいトントントン

日が沈む中天春の六日月

蜷のひげ水底探りつつ進む

蜷の道微粒砂動く流れあり

蜷の子の分速三分ぶの速さかな

仲本興正

蜷の道とぎれし先に蜷もなし

春満月遊び足らずの子の上に

春昼や社内放送異国語へ

鎌倉に虚子の星座や犬ふぐり

段ボール雑然と積み入学子

佐藤宏之助

下町の人情不変空襲忌

浮島に巣造る鵜の番かな

御膳水出て直ぐ春の川となる

空襲忌くくくくくくと暮つるむ

蜷の道杖で和尚が差し示す

増田陽一

鳥帰るとき朝雲の真珠層

起重機^{クレーン}は角度変へたり鳥雲に

梅林に深き呼吸を春の月

幼年の果の老年草朧

川蜷が殻頂廻す昼の月

光 みち

近江より戻りて仰ぐ春の月

雛調度誰の白髪か手鏡に

春暁や根本中堂太鼓鳴る

蜷動くまで離れぬと屈み込む

蜷飼つて桶の中にも蜷の道

田宮敦子

ひとり居の彼岸待ちをり竹帚
門の鍵しめ忘れをり春の月

ビオトープあちらこちらに蜷の道

浅野正美

春の月電話の声の弾みけり

別れてもきつと見てゐる春の月

春の月屋根から屋根に猫走る

暗闇に白木蓮の花明かり

鳥の恋池上線の下潜る

開花予想聞いて桜木何思う

犬ふぐりいぬと犬とがこんにちは

川底に這う跡残し蜷の住む

磯目健二

雛納め柔らかな紙で顔おおう

沼暮れて曙橋に春の月

武者昭七

沼渺々利根のあたりが春満月

との曇る雲の裂け目を鳥帰る

沼の道行く足とどめ春満月

女房の爪切る音や日あし伸ぶ

沼尻や堰の水底蜷の道

春月の鎌の鋭さ国境

蛍火や蜷棲む川のほとりかな

春泥をこねあげ蹴ちらし児ら帰る

吉羽多美子

啓蟄と言へば曳く杖軽くなり

寝そびれて庭に立ちをり春の月

飯田孝三

遠廻りして公園の梅ま白

菜の花やここ来れば征くエンヂンの音（知覧）

白梅や腰掛け茶屋の緋毛氈

蜷の道ローマへつづく蟄伝いしづたい

春満月北斎筆を拱ねたり
下校の子道草蜷の水汚し
蜷の水弟の前で跳び損ね

武者正子

八年を破屋に住みてただ無言

下校する子等は足跳ね声弾ませ

(下校の子等足跳ね声を弾ませて)

形よしといえぬ伊予柑味は良し

小鳥去りかすかにゆれる花椿

一句鑑賞

光成高志

起重機クレーンは角度変へたり鳥雲に

陽一

ふとクレーンを見ると先ほどよりその角度が変わっている、その向こうの空を鳥が帰って行く、寂寥と春を迎えたかすかな安堵感が感じられます。「寒林を突き出しクレーン向き変はる」(石原八束選)の私の句は冬の句。

寝そびれて庭に立ちをり春の月

多美子

寝そびれて庭に出てみると中天に春の月が煌々と輝いていて、思わずしばらく見上げている様を庭に立ちをり

と表現されました。老年になると寝そびれたり夜中に目覚めて寝られなくなったり夢うつつの中に朝を迎えたりするものです。そういう時は春の月を見るのがいいです。
蜷飼って桶の中にも蜷の道

みち

蜷の兼題にて作句するに際し、幼年期の記憶もあるがもう一度じっくり見ようと思つて昨年見た女子大の構内の庭園に入れてもらおうとしたら断られて困った。「蜜沢着きし車がライト消す」(H1)の句を思い出しこの沢に行つてみたら、以前よりハケの水が整備されて、ちよろちよろ水が出ており浅みの流れがあつて蜷がかなり沢山いたのです。早速、みちさんを案内して蜷を良く見ました。いつのまにかみちさんは蜷をバケツに入れて飼つてみようと持ち帰り観察して掲句をものにされたのです。その蜷は無論元の水に戻しました。

小鳥去りかすかにゆれる花椿

正子

四十雀などの小鳥が飛び立つた直後少し椿の花を揺らしたのです。それを瞬間的にとらえた佳句です。こういう句は類句があるとか、季語につきすぎとか、ベテラン俳人がよく指摘するところです。私は類句結構、つきすぎ結構と思つています。それが作者の発見ですもの。

一句鑑賞

との曇る雲の裂け目を鳥帰る

磯目健二

昭七

棚引く雲に蔽われた天空の一角に、裂け目ができて青空が覗いている。仰ぎ見れば、今しもそこを渡り鳥が列を作って北の地へ飛び去ろうとしている。

蜷のひげ水底探りつつ進む

高志

蜷の道微粒砂動く流れあり

〃

堀割に棲息する小貝の蜷が触角を動かせて、まるで月面探査機のように水底を這っている。それほど流れがあると思われないが、蜷の這った痕跡が道のように印された砂地の微少な砂粒が流圧で微かに動き、痕跡が絶えず変形している。小生物の微細な運動と微かな水の動きを的確に捉えた二句。いかにも自然科学者らしい観察だ。作者の別の投句「蜷の子の分速三分の速さかな」からも同じ印象を受ける。

鳥帰るとき朝雲の真珠層

陽一

旅立ちを寿ぐように、朝のひかりを受けて雲が七色の光沢の層に彩られている。その空を横切って渡り鳥が飛び去ってゆく。朝雲の色彩を真珠層と比喩的に見立て、鳥雲と取り合わせた美しい句である。

春の月屋根から屋根に猫走る

敦子

かのポーではないが、この場合黒猫が似つかわしい。発情期の雄猫は本能に追われるように奔り廻る。夜空には潤んだような春の月が浮かんでいる。朔太郎の「月に吠える」や「青猫」の世界を連想させる、具象的でありながら象徴詩的でもある句。

春暁や根本中堂太鼓鳴る

みち

根本中堂は比叡山延暦寺の総本堂。間近の宿坊に泊まった作者は、夜明けに本堂で営まれる勤行の太鼓の音に目覚めた。聖地の夜明けの静寂。それを破って響く勤行の厳肅な始動。春暁なればこそ余計に印象的である。

別れてもきつと見ている春の月

正美

春の満月を見ていて、ふと遠地に去った親しかった知人を想い出す。あの人も同じく見ているだろうと信じて懐かしく思うのである。月に因んだ千差万別の別れがある。たとえば「湯島の白梅」とか「金色夜叉」のような哀しい別れもある。泣いて別れた相手も、この月を見て私を思い出しているかもと考える。そのような新派的連想も誘発させる、春愁豊かな句。

ツッセイー人間対人間

磯目健二

二月句会の兼題「野焼」で私の投句は、「蘆焼くや煙火
たなびき沼縹渺」であった。後日、オープンカレッジで主
宰と同席したとき、この句の評言を得た。わが先達の言葉
を、別れてから脳裏に反芻して考えた。主宰のいうように
上五「蘆焼くや」がそれ自体で相当言い尽くしているの
で、次の「煙火」はいかにも「焼く」につきすぎている。
主宰のこの指摘は納得できた。僅か十七音の短詩型でこ
の表現の重複は許されないロスである。また「煙火」も時
間的に継続する煙と瞬時に燃え上がる火炎とを等しく並
置して一つにする語詞が適切か、またそのような熟語が
一般に行われているかも、一考の余地がある。下五の漢語
表現「沼縹渺」も、広々茫漠の意味としても重過ぎる。む
しろ「煙たなびく沼の上」と和語表現にするのが良いので
はという主宰の提言は尤もと思われた。煙火と縹渺とい
う漢語の連続も、漢語の語呂の良さや曖昧さに頼みして、
さらなる言葉の吟味を怠っている気味もあろう。もちろ
ん言葉の吟味も客受けのいい、洒落れた言い回しの追求
に堕してはならない。句作に習熟してくると、知識やテク
ニックに頼って物からのじかの感動や、素直で平易な表
現の良さを忘れるようになることを戒める森澄雄の言葉
を、以前「俳窓評論纂」で読んだ記憶がある。主宰の評言

に触発されていろいろと反省させられたのであった。白
金葎に入会し俳句を本格的に始めて三年の初心者として
は、毎月の例会での諸先達の評言は、ほんとうに勉強にな
る。毎週オープンカレッジの源氏物語精読の教室で主宰
と顔を合わせ、俳論や体験をいろいろ雑談裡に聴けるの
も嬉しい。根が凝り性で入会以来、ずいぶん俳書を漁った
が、活字はどれも頭に残らない。反対に肉声の対話のほう
は、脳にしみこんで実になる気がする。人間対人間のコミ
ュニケーションは別物なのだとつくづく思われる。そ
の意味で「白金葎」の毎月の例会は、私には貴重な場なの
である。「白金葎」に連載中の「芭蕉のかるみ以後」でも
明らかにされているが、七部集の連句歌仙に見る蕉門の
師弟の強い絆は、共同の文学土壌の上に人間対人間のコ
ミュニケーションで合奏的に創る俳諧なればこそそのも
の。座の文学だから主客の位置を定め中心の指揮者に師
を仰ぐ。また仲間を互いに尊重して、結社の絆が強まる。
たまたま司馬遼太郎と赤尾兜子との対談を読み、その中
で司馬遼太郎が日本の古典芸術における師恩の伝統は真
言密教における師承に発祥するのではないか、と指摘し
ていたのが興味深く思われた。師承とは帰依する師との
直接の人間対人間のコミュニケーションによる真理要諦

の伝達継承である。唐の高僧惠果と空海、宋の高僧如浄と道元などがその例である。有名な飛鳥山の挿話に見る子規と虚子の関係など、また秋桜子・誓子などの「ホトトギス」からの脱退独立の近代的意味や現代俳句結社の有り様、さらにはカルチャーセンターの盛行など師恩師承の関連でも考えさせられることが多い。だが、いつの世も人間対人間のコミュニケーションが基本なのだと知る。AIの驚異的躍進に象徴されるSNS、IoT、GAFAG、5Gなどグローバルで急激な情報社会化は、私にはその利便性よりも現代のバベルの塔を思わせて、そこへ一住民として追いつまれる脅威を覚えずにいられない。それからの救いを、人間対人間のコミュニケーションの変わらざる永遠性に私は託したい。高スペックの情報機器やアプリの愛用よりも、真の師友との交流をまず尊重したい。そう考える私は、古くて甘い人間であろうか。一句の反省から思わぬところへ脱線をしてしまった。

俳窓評論纂

*2/25の新聞はドナルド・キーンさんの死去を大きく報道した。昨年金子兜太さん、今年の平野ひろしさんに続く訃報である。昨晚のNHKでは特集の対談が行われた。い

まグーグルで検索すると、キーンさんの特集が溢れている。キーンさんを紹介するのは難しいぞと思う。みちさんが北区の食堂で偶然見かけて、握手を所望して果たしたと私に自慢した。ぎよる目で見上げられ柔らかな温かな手であつたと言う。ドナルド・キーンを評した三島由紀夫の言葉を検索したが出てこないの、夕べのBSの記憶でここに紹介すると、誰も目にしたことない高圧下の深海魚を漁^すなどり地表に出れば忽ち変色するはずのものを色も形も変わることもなくそのままを見せてくれた天才作家であつたと。深海魚は日本文学をたとえているのだ。日本は科学技術を西洋に学び日本化していったが、日本文学は世界の中で神秘的なもので欧米の誰もよくは知らなかったのをキーンさんが知らしめてくれたということ。日本文学のほんとの意味の開国をキーンさんが果たしてくれたのだ。そのきっかけが18才で読んだ源氏物語であったとか。これは私にはうれしいことだ。私の源氏物語初読も18才であつたし、今も熱心に読んでいるのだから。88才の米寿の時に帰化したがその時NHKの国谷裕子キャスターと対談をしている。その大事な所を左に写しておきます。

日本人とは何か。キーンさんはその謎を解く手がかり

として、戦中戦後の作家の日記に注目しました。永井荷風や伊藤整、山田風太郎など、およそ30人の作家の日記。

中でもキーンさんが共感したのは、もとプロレタリア作家で戦中に言論統制のもと、転向を余儀なくされた、高見順の日記でした。高見の日記には、10万人に及ぶ犠牲者を出した東京大空襲直後の日本人の姿が描かれています。母親を疎開させるため、上野駅にやってきた高見、そこは焼け野原となった東京から逃れようとする人々であふれていました。家を焼かれ、家族を失い、極限状態に置かれているにもかかわらず、節度と冷静さを失わないで、我慢強く順番を待ち続ける人々。それを見て高見が記した、次の一節は、キーンさんの心に深い感銘を与えたと言います。「私の眼に、いつか涙が湧いていた。いとしさ、愛情で胸がいっぱいだった。私はこうした人々と共に生き、共に死にたいと思った。(中略)何の頼るべき権力もそうして財力も持たない、黙々と我慢している、そして心から日本を愛し信じている庶民の、私もひとりだった。」国谷…キーンさんは、ヤシの木陰に座って、海を眺めながら片手にラム酒一杯がある、そんなことはこれっぽっちもしたくないって、おっしゃっているんですけれども、常に次の仕事のことがいっぱい。この次にあれをやりたい、これをや

りたい、そういう生活を70歳、80歳過ぎてもずっとやらせてきたわけですが、今も同じ心境でいらつしやいますか。キーン…そうそう。私、今年89歳ですが、だんだん頭のことを心配します。最後まではつきりするかを考えて、しかし、できるだけ、これから同じように、面白いものを調べたり、書いたり、話したりしたいと思っています。ものの名前だとか、これなんというかを知りたい。何のためにもならないとわかっていても、知りたいということがあります。国谷…何の役に立つかわからないけれども知りたい。キーン…知りたい。国谷…知りたい。知りたい。知りたい。キーン…知りたい。知りたいです。国谷…それがその、物事の理解に到達する唯一の道。キーン…そうなります。文士の道だと一番いいです。それは一つの夢です。国谷…夢？

キーン…夢。完全な文士になること。国谷…完全な文士になること？キーン…昔の学者が、自分の研究で、ものを読んで自然を見て、いろいろ楽しんでいました。私は、いつもこういう感じで、それも好きですが、しまいに、私は、昔風の東洋人のように、静かにしたいと思います。以上をコピーして載せた。冒頭に書いた源氏物語の英訳はアーサー・ウェイリーによってなされ、その訳が素晴らし

いものであったので、源氏物語は世界文学として蘇ったのだ。ドナルド・キーンはウエイリーの弟子である。この偉業がどうして出来たのか島内景二さんが直接キーンさんにたずねたらば、キーンさんははっきりおっしゃった。「私は、これまでの人生で本物の天才を二人だけ見ました。一人はウエイリー先生、もう一人は三島さんです」キーンさんも天才であった。三島由紀夫と同じ年くらいで仲がよく、よく話をしたらしい。天才同士は心の琴線に触れるものを互いに感じるのではなからうか。以上は私の感想である。

芭蕉のかるみ以後（50）

光成高志

巾に木槿をはさむ琵琶打

荷兮

琵琶法師が頭巾に木槿の一枝をかざしている様。前句の月見の席に興を添えた付であるが、朝に咲いて夕に萎む木槿の花を挿した所に風狂味があり、李白をもつて任ずる風流人にふさわしい。

うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに

芭蕉

牛の死後を弔う夕露おく草のあたりにという意。草の夕暮れの草は牛に手回けるための草であるが、同時に夕暮れを修飾するようにした修辭。琵琶法師のかざす木槿の花に無常の余情を感じ取って、風流人にふさわしい牛の追善供養を思いよせた付。私の生家

の前の神社に牛と大きく深く彫った牛塚があつてその縁に乗ってぐるぐる回つてよく遊んだのを覚えていて。あれは牛を弔う墓であつたのだ。芭蕉は室町時代の連歌師牡丹花肖柏から連想してこの句をつけたのであろう。昨年池田市の大廣寺を綾女さんの案内で訪ねた時、高い大きな牡丹歌碑が立っているのを見た。肖柏は池田城主の一族の誘引により大廣寺に庵を結んで隠棲し、門人等に和歌連歌を教え、源氏物語、伊勢物語を説き、花と香と酒を愛し、出遊するときは角に金を塗った牛に乗っていたとか。牡丹の苗をこの時持ち帰つて山内に植え、その香り全山に満ち溢れ高貴な花ともてはやされた故事がある。自らを牡丹花肖柏と号したので、私が見たのはこのことを刻んだ歌碑であつたのだ。それから二百年位後に芭蕉に莊子を講じたという田中桐江が池田に来てその伝統を引き継いだのだ。肖柏は連歌師の宗祇の弟子であり、宗祇の伊勢物語の講義を書き取った「肖聞抄」を残している。宗祇はいわゆる古今伝授を受けた古典学者であり、弟子の肖柏・宗長と二人で詠んだ「水無瀬三吟」は連歌の最高傑作として有名である。芭蕉のあこがれた連歌師であつて、笈の小文に「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫道するものは、一なり」と書いているし、世にふるもさらに時雨の宿りかなを踏まえて、世にふるもさらに宗祇の宿りかな、という句を詠んで宗祇の心を我が物として人生を生

きていこうと決意したのだった。その弟子の肖柏の故事を思い起
こしてこの句をつけたのだと思う。馬ではなく牛が風流なのだ。

箕に鯨このしろの魚をいたゞき

杜国

鯨を箕に入れ頭の上に載せてゆくさま。前句を辺地の漁村とか島
などのさまと見て海女などの風俗を思いよせた付。米とか豆など
を売ってそのかたに戻りにこの魚を買ったのではなからうかと附
合考にある。鯨に次の伝承がある。むかし下野国の長者に美しい
一人娘がいた。常陸国の国司がこれを見初めて結婚を申し出た。
しかし娘には恋人がいた。そこで娘思いの親は、「娘は病死した」
と国司に偽り、代わりに魚を棺に入れ、使者の前で火葬してみせ
た。その時棺に入れたのが、焼くと人体が焦げるような匂いがす
るといわれたツナシで、使者たちは娘が本当に死んだと納得し国
へ帰り去った。それから後、子どもの身代わりとなったツナシは
コノシロ（子の代）と呼ばれるようになった。

わがいのりあけがたの星孕むべく

荷兮

われに子を得させたまえ、と明けの明星に祈る意。鯨を伝説にあ
るように子の代とり、その縁により子を孕むと趣向を立て、子
を得るために祈るとした。頭に頂いているのは女と見て、その鯨
は神に捧げて子をもたんことを祈るのであろう。

けふはいもとのまゆかきにゆき

野水

姉が妹の眉描きにゆく句意。前句に君の御胤を宿して寵を専らに

しようとする侍妾を連想して、君寵の衰えないようにする化粧、
つまり眉を落として化粧することは喜びであつたので、そこに姉
の心遣いを句作した付。結婚するとお歯黒をつけ、子供が授かる
と眉掻きをするのが当時の風習である。

綾ひとへ居湯おゆに志賀の花漉して

杜国

名残裏五で花の定座である。居湯は、他の場所で沸かした湯を風
呂桶に入れてはいるもの。志賀は山桜で名高い近江の歌枕。その
桜の花が散り込まれた湯を綾絹で漉して湯浴みするさま。前句の
「いもと」がそのように大事にされているという心。綾ひとへも
志賀の花も前句を貴女とみて位をとつたものである。

廊下は藤のかげつたふ也

重五

挙句である。藤の花房が長く伸びて、そのかげが廊下にうつつて
いるさま。落花に藤の花は時節の寄せであるが、居湯のあるとこ
ろに藤壺などが想像され、春日遅々たる金殿玉様の趣がある。白
氏文集の「凶宅」「傷宅」という風諭詩のなかに「繞廊紫藤架の
句があり、源氏物語では胡蝶巻で、前年に新築なつたばかりの光
源氏の大邸宅六条院の春の街における華麗な船楽の描写の中に、
「ほかに盛り過ぎたる桜も、今盛りにほほ笑み、廊を繞れる藤の
色もこまやかにひらけゆきにけり」と引用されている。白居易の
「凶宅」「傷宅」の心は題名が暗示するように、回廊に藤の花が映
っているような大邸宅でも、いずれは傷んで誰も住まなくなる不

吉な邸宅になってしまうのだというもの。金殿玉楼もそのむなしさを透視する芭蕉の捌きに見据えられているのだ。

以上で「冬の日」歌仙のこがらしの巻を終る。

受贈誌(平31年3月号)

春風や薬師眷属十二神(東京クラブ)

切り通し抜けて鎌倉春の風(〃)

春風に頁繰らるるカフエテラス(〃)

月や昨日負はれし子今日歩み(〃)

四次元へ誘ふ香り枇杷の花(あふむ耳)

山尾かづひろ吟行ノート(二月)

謎解けぬまま春眠の続きをり

春眠や夢に誰彼みな若く

白箱に容れて白子の売られをり

ランナーは平塚あたり寝正月(銀座百点選)

故郷は播州母と摘む薺(〃)

風花や庭片隅の犬の墓(〃)

冬夕焼野球少年帰る頃(〃高橋睦郎選)

お便り広場(到着順、敬称略)

二月も終り近くになりました。今年は正月以後わりと暖かい日が多く過ごしやすかった。体調も悪くないので

晴夫

武子

守啓三

璃子

山尾かづひろ

光 みち

飯田孝三

光成高志

三田 完

岡村俊一

関 容子

長屋璃子

朝タウオーキングやっています。10周年記念誌発行資金

の手助けになるほどの余裕ありませんが、私の出来る

範囲で少しだけ送ります。私も米寿を過ぎて一日一日が

元気で過ぎれば良いと考えています。高齢者の一人暮らし

で話しやすいのか資金援助をよくいわれます。ピンピン

コロリと逝けばよいが誰も分からない。分からないから

少しは持つておきたいと考えています。あまり体力的

にも精神的にも無理せぬように。

寒中お見舞い申し上げます。とは言え桜の季節のような

今日この頃です。お元気でご活躍の事と思います。喜寿

の会を地元で持つ話になりましたので又御連絡します。

(九月末か十月初め) 亥ノ子如書き初め終えし子らの去る

百合子。お元気で。(225 百合子)

「白金霞」二月号を送付頂き有難うございます。又実花艶

寿集の掲載も感謝致します。写真は頂いて居ないと思

います。PS この葉書は伊勢神宮おかげ横町に所在する「山口誓子記

念館」で昨年購入した一枚です。「この家に福あり燕巣をつくる」誓

子 毎年春、赤福本店に燕がやって来ます。古店の軒を忙し気に出入りして、昨年の巣をつくらうついたり…。のれんの染めぬきは、

そんな様子を見られた俳人山口誓子先生が詠まれた句です。

(2.25 下田進)

拝啓 梅の花が咲き始める頃となり、肌寒い日々お元
気ですか。私方変わらず過ごしています。先月白金葎94
号を送っていただき有難うございました。いつもお礼を
しなければと思って読ませていただいていたしましたが、基
金に少額お送りしますので、入れてください。県シルバー
作品展の絵画の写真ができましたので、合わせてお送り
いたします。まだまだ寒い日が続きそうです。ご自愛くだ
さい。敬具 追伸…写真の絵は竹原の賀茂川を画材に描いていま
す。四十号です。今年十一月に和歌山で行われるネリンピックに出
展予定です。

(227 昇)

前略 私の手紙と入れ違いに白金葎二月号届きました。
図書館で石飛幸三先生の「こうして死ねたら悔いはない」
この本を読んでいて高志に出した手紙の中に大変間違っ
たこと書いたと思つてすぐペンを取りました。「苦しみた
くないからピンピンコロリと逝きたいなあ」そんな考え方
誰もが少なからず持つていると思いますが「ピンピンコ
ロリ」は突然死です。それは家族にとつてはたまりません。
別れの言葉を交すこともなく何の心の準備もなく急に死
なれてしまつてはその悲しみを癒やすにはすごく時間が
かかります。死んだあとのことは知らないよというのは
自分のことしか考えていない視点です。いろいろと考え

させられることがいっぱいありました。前のピンピンコ
ロリは撤回します。私達は単独で生きてるわけではあり
ません。そういうわけで四週間に一度の内科三ヶ月に一
度泌尿器科一年に一回脳神経外科の検査を受けたらゆっ
くりと生きて行こうと思います。少し俳句の勉強でもす
るか？ 草々

(224 健二)

「白金葎」第95号拝受拜読、一気に読みました。いつ
ものことながら、編集から発行までのこの速さには瞠目
しております。一気呵成とは正にこのことですね。それか
ら第93号では、小生の旧作「流転」の身に余る鑑賞を
ありがとうございました。それにつけても「天狼」には、
さして交流もなかった小生と貴兄の間柄でしたが、誓子
先生の亡きあとにこのような深い信頼関係を築きあげら
れたことをとても嬉しく思います。右御礼芳々・・・

(228 宏之助)

昨日(水曜日)の雑談では、芭蕉の「奥の細道」の徹底
的推敲、特に収録句の作為性についての見解を面白く聞
きました。芭蕉は一宗匠たるを潔しとせず独自の創作家
を目指し、17世紀に全き芸術の創造を考え実現しました。
その偉さに感動します。来週は比叡山へ詣でる由羨まし
いです。老骨の私など先日の顔真卿展見字では、上野公園

口から博物館まで、ただ歩くだけで音を上げる体たらくでした。主宰の日頃の健脚ふりと何という雲泥の差でしょう。そんな私も六十年前は坂本から中腹の被差別部落まで登つて遙か山上を仰いだり、老いては八瀬から上り、湖西線沿いに大津へ出たこともありました。今回の旅で、みちさんと共にきつと素晴らしい吟行句が生まれることでしょう。3月号掲載を楽しみにしています。さて、おこがましく芭蕉の推敲ふりに倣うわけではありませんが、先日 of 原稿の最終、ラグラフィがいかにも舌足らずで目に余るので修正いたしたく、ここに修正原稿をお送りしますので、なにとぞお許しください。(3.2 健)

もう三月になりました。雨もやつと降りましたが、降り足りず雨のかゝらない土は白ツボクで長く乾いていた土にまだぐ水不足なのですね。二月十八日の白金霞はお疲れ様ようですがこれだけ日も経ち気温上昇の日もありでかなり様変わりとか三月表紙が楽しみです。二月十九日に所沢税務署に行き、航空公園(正しくは航空記念公園)が至近距離ですが、広い公園に入つて見る足の力もなく、ヨタくと帰ってきました。何年も前自転車に乗れる頃は何度か行き、桜も椿も楽しみました。今は蠟梅の名所が売ります。建物も出来ランチできる所もあるそうです。ドッ

グランもあります。ご光来の節はご一緒ならヨタクお供できるかもしれません。隣駅の新所沢に住んでおります。ボロ家おいといでなければお茶でも差し上げたく存じております。草の戸と云えば素敵、ボロ家も俳句にすれば昇格です。三大節の歌わくありがとうございました。現人神の世は遠しですね。今年は風花も見ず終りそうですが御誌の三作者の方々の風花句で大いに満了いたしました。さて事務的の用件でございますが、白金霞誌代遅ればせながら三十一年一月より十二月迄一年分六千円同封ご査収下さいませ。前年の通りと致しましたが誌代変更されていらつしやいましたら、お申し越し下さいませ。すぐ差額を納めさせて頂きます。銀座百点二月号とバスソルトお楽しみ頂けましたら幸いです。花粉症おありでしたらご用心。(3.2 璃子)

長いご無沙汰申し訳ありませんでした。体調はかがですか。大事にして下さい。当方は昨年末から年頭にかけて路上での転倒、インフルエンザ(いずれも救急車の世話になり)今は花粉症とかですっかり落ち込んでいます。少し古いものですが、賢治と鏡花についてのエッセイがありましたので同封します。ご自由に処理して下さい。早くスッキリとした気分でご会に出られるように心がけます。よろ

しく願います。

(2.5 昭七)

その昔、そうでしたか。私はたわいもない日常の一コマ、貴兄私の下宿に泊まった際あんちよこ髭剃りが切れず、あつ痛!と言った場面を覚えています。昭和40年、うーん、54年前ですか。昨日は謡の会があり朝メールを見てすぐ出かけ、返信が今になりました。後輩がプロの道を目指して成功し、その主宰する会で短い謡を10人程で謡いました。能楽のプロとは、何とも様々な道があるものです。(中略)ビックリが続きましたが、私は相変わらず謡に精出しています。仕舞は止めましたが、謡は苦勞しながら覚えたり、とも角何回も何回も稽古をして謡会に出たりしています。これが頭の老化防止に役立つのではないかと、楽しみも勿論ありますが、思っている次第です。句作の進境は著しいことと思います。テレビのプレバトの番組で夏井先生の直しを成る程!成る程!と楽しく見えています。自分からやる気はなかなか起こらないのですが、ではまた。

(3.11 メール小野勝士)

(横田輝子さんは時々俳句を送ってくれます。貴殿の仕舞ではありませんが、私は今太極拳に凝っています。週三回出。)

雨の後急に陽さしも強く雑草が元気になってきました。三月はよきそうで意外に何かしら予想外によろしくない

事が起こり、句会でも常連出句百パーセントの方、二名出句なく全体に低調になってしまった気がいたします。気を取り直してこんな手書き会報ですが何とか出来上がりしました。昨日(十日)の朝浅黄色の鳥の卵を拾いました。以前に拾ったときは半分に分かれた片方で今回は完全な形ですが、中身はなさそうで軽く白いものも落ちていますが両方ともうずらの卵より小さく何の鳥なのでしょう。この辺りで多いのはカラス、キジバト、四十雀、尾長、ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、でたまにメジロ、セグロセキレイ、ヤマガラ、ジョウビタキ、ツグミ等で、カワラヒワは前に来ましたが、全く来なくなり、ワカケホーセンインコも木の枝に吊した簀に入れた餌に群がっていました。が、高いところに吊す事が出来なくなつてから来なくなりました。二三羽来るようです。先日みちさんから古賀政男音楽博物館の海の歌の紹介紙頂きありがとうございます。この博物館は故人になりましたが、アマチュアでバイオリン制作している方が弦楽器製作者の発表会でプロのミュージシャンの試奏などあり一度行ったことがあります。頂いたペーパーの楽曲の多さにびっくり、私のような古い人種の知ってる唄作詞家作曲家さつと見ただけで圧倒されました。ヒマを見つけてゆつくり眺め知ってい

れば口ずさんでも見たく楽しいものをめりがとうござ
いました。白金葎こう雨と気温で一段と元気になったと
思います。御誌もその如くめりますよう願っております。
(312 璃子)

桜のたよりが待ち遠し季節となりました。お元気で
過ごしてでしょうか。白金葎二月号を送っていただき有難
うございました。いつも多くの方の俳句を読ませていた
だき感謝しています。九十五号も発行されていることは
すごいと思います。取りあえずお礼申し上げます。寒暖の
時節ご自愛ください。
(315 昇)

句会で久しぶりに蜷に対面し子どもを想い出
しました。実物にお目にかかるとは思いませんでした。源氏
物語精読が当分無く週一回の逢瀬も無くなって残念です。
最近、飯島晴子を発見。島内景二の源氏研究は注文し楽
しみにしています。三月号期待しています。(317 健二)

我孫子日記

	2/15	例会
	2/17	古賀ミュージアム
*	2/19	北総病院
	2/20	SOA
	2/27	SOA
	3/1	武蔵屋
*2	3/6	比叡山
*3	3/7	大津
	3/8	醒ヶ井
*4	3/9	新宿
	3/12	北総病院
	3/13	SOA
	3/15	例会

*連絡バス谷津の枯田の道縫って

谷津田道抜けて余寒のニュータウン

*仕丁雛草鞋の足をヨガ組みに
雛壇や髭長垂らす右大臣

雛壇の茶器の茶笥の大きくて

吊雛俵に鼠乗ってゐる

吊雛這ひ這ひの子のすべり込み

雛壇の菱餅五色重ねをり

貝合ぱちと音してひなまつり

吊雛回して小鳥喜ばす(みち)

担ぎ女の絵画の前に雛飾る(〃)

空中の台うたなに五人囃子かな(〃)

綿見ゆるおすべらかしの女雛かな(〃)

水天宮木下河岸に桜さくら芽吹く

*近江の海霞うみあさむ中にも近江富士

春時雨賢治歌碑立つ延暦寺(みち)

沙羅大樹木肌に滑る春の雨(〃)

冬帽の法衣の僧の下車したり(〃)

比叡山の紅のものなる椿かな(〃)

本尊に璃子の璃の字延暦寺

春の夜の琵琶湖灯に囲繞かままれて

ふと見ればみちが玉座に春座る

啓蟄やさんみやくさんぼだいトシとしく

穴太^{あう}積背にして地蔵檜供花

ゴミ一つなき参道春の雨湿り

石楠花も馬酔木も蕾比叡山

杉の実に触れて懐かし杉鉄砲

春の比叡香港^{ほんこん}からのツアー客（みち）

★満天星の花芽天蓋巴塚

先づ義仲公の墓椿哉

次に芭蕉翁の墓アリストメリア

二百年忌三百年忌碑檜の花

兒童らの聲して春の翁堂

翁堂戸の開かれて春寒し（みち）

狂句吾聲明学僧にくらぶれば

☆彦根にも銀座町あり春寒し

彦根城見ゆる町筋春の風（みち）

東風吹かば醒ヶ井駅員ひとりぼち（みち）

梅花藻の川淀みなく流れをり

梅花藻の上の漣日のひかり（みち）

梳る如く梅花藻ゆらぎをり（〃）

泡子てふ西行水の清水湧く

醒井宿露地に小鉢の節分草（みち）

醒井宿雪の伊吹山^{いぶき}が真正面（〃）

源流や不断桜がちらほらと（〃）
挙手の日本武尊の像桜咲く

編集後記

今月、蜷が結構速く言うことを知った。「どこ行つたポケットのかたつむり」を昔作って悦に入っていた。兎と亀というけれど、亀も結構速く歩く。三井寺の山中で昔見た。蜷は子の方は結構速い。一分間に三分約一センチ進む。皆、比較するから速いだ遅いだ賢いだ愚鈍だ金持ちだ貧乏だと云う。生死だつてそう。生きているものが死ぬから怖いという。生は生、死は死。それぞれ位がある。道元禪師が書いて残してくれている。蜷を見てそれを知ったのが今月が一番嬉しかった。

白金葎基金御礼尾崎昇様…十口 榎田健三様…百口

白金葎三月号（通巻第九六号）平成三十二年三月十八日発行

編集・発行人 光成高志 発行所 二七〇・一二九 我孫子市南新本二四・七

表紙の題字…加納綾女 同写真は平成三年三月十八日の白金葎